

# 学術通信

IWASAKI ACADEMIC PUBLISHER NEWS

No. 81

2006 = 初春

## ■目 次■

- 論文・エッセイ● 「思春期青年期ケース研究」シリーズを終えて  
小倉 清 2  
『入門メルツァーの精神分析論考』について  
木部 則雄 5
- 書評エッセンス● 初期分裂病 4  
こころの再生を求めて 7
- 情 報 版● 書誌 2005.10 ~ 12 8
- 巻 末 付 録● 新刊案内 = 2005 冬

# 「思春期青年期ケース研究」 シリーズを終えて

小倉 清

このシリーズは年に2回刊行して、全10冊、5年計画で始まった。第1巻の『摂食障害』は1994年12月に発行されて、第10巻の『初期分裂病』は2004年12月に発行されたから、当初の計画の倍の年数にわたることになった。ご執筆下さった先生方は日々の臨床やその他のお仕事で多忙をきわめておられる、その合間をぬっての書き下ろしであって、そのご労力に対して改めて深く御礼を申し上げます。

実をいうとこのシリーズを初めに計画したのは数人の方々で、その人たちが何回か集まったのは事実であるが、編集委員としてお名前があがっている28人全

員が一堂に会して討論したことはなかった。それは、このシリーズについて感心を持ってくださるであろう方がた、執筆やコメントや序文や解説を書いてくださるであろう方がたを、その数人が勝手に心に思い、いきなりお手紙を差し上げて、有難くも同意して下さって、大変な労力を頂いた先生方も含まれているからである。各先生方からは常に強い関心をお示しいただき、さまざまのご意見やら具体的な案などをいただき、さらには執筆者について推薦をいただくなどして、全体の編集上の参考にさせていただいたわけである。そんな風にして皆様の力が合わさって、このシリーズが出来上がったという点を是非とも強調させていただきたいと思う次第である。

さて10冊そろって数えてみると、執筆いただいた方は実に82人に上る。様々の職種の方がたであり、思春期青年期精神医学の臨床の実際的一端を、そのことは示しているといえよう。論文・症例報告合わせて66題あり、また座談会

---

おぐら・きよし=児童精神医学, 精神分析  
クリニックおぐら。著書に『子どものこころ』  
(慶應義塾大学出版会), 『治療者としてのあり方をめぐって』(共著, チーム医療), 『児童精神科臨床4 入院治療2』(共編, 星和書店)など多数。「思春期青年期ケース研究」シリーズでは、『摂食障害——拒食と過食』、『女性と思春期』を責任編集。

は3つ載っている。1冊につき執筆者の人数が4人から13人になっている。論文の数も一冊につき5題から9題にわたっている。自由な形であまり枠なしにお書きいただいたのでそうなっただろうし、また各冊それぞれに2人の責任編集者が当たっていたので、それぞれの編集方針にもよったのであろう。全体としてはあまり理論的にならず、実際的なことを頭において書かれたものになったと思う。

テーマとしてとりあげられたのは以下のものである。

摂食障害——拒食と過食  
境界例——パーソナリティの病理と治療  
不登校と適応障害  
感情障害とリズム障害  
女性と思春期  
身体化障害——思春期の心とからだ  
学校カウンセリング  
虐待と思春期  
暴力と思春期  
初期分裂病——分裂病の顕在発症予防をめざして

精神科プロパーの問題から今日的なテーマまで、臨床的な問題の大体はとりあげられたと思う。含まれなかったのは昨今、流行の軽度発達障害と強迫障害であろうか。このシリーズが始まった10年前は無論、今の流行以前以前の時期で軽度発達障害とかアスペルガーなどは、信じられない人もいようが、まるで話題

にもなっていなかったのである。これらの名前は畢竟、流行の常として遠からず霧散消失するであろう。患者の利益や治療を考えない診断名のための診断名は消失して当然のことであろう。伝統ある神経症やヒステリーという名前さえ消失したのである。もって銘すべしというところである。

強迫は思春期心性の一つでもあるのだから、改めてテーマとしてとりあげなくても、それぞれの分冊の中に随所に出ているはずである。薬物療法、精神科の特殊療法、入院治療、デイケアなども特にそれとしてまとめてとりあげてはいないが、やはりあちこちで語られているものと思う。

このシリーズはまた症例集としての特徴をもった面もあるかと思う。読者が症例を読まれて御自身の経験と照らし合わせながら、更に考察を深めることができらばと思う。

座談会は出席者がそれぞれ本音を出し合って、ぶっつけ合った型になり、結構な読みものとなっているのではなかろうか。論文形式では十分には出しきれない味がそこに発見されるのではないか。

諸般の事情によりシリーズ完結がもとの倍の長さののびたと先述したが、何しろご執筆下さった先生方はとてもお忙しい方がたばかりで、どうしても臨床のお仕事優先される。臨床というものは、もちろん元来が非常に消耗させられる体験であって、気力・体力はもちろん精神的に大きな負担となるものである。それだけにそれらの体験をよく消化し、思索

を深め、考えをまとめるのにはそれ相応の時間を要するものである。安易な作業では到底ない。時間が経過して、そしてまとめて書いているうちに、自ら、ああここはこうすべきだった、ああすべきだった、なぜこのことに当時は気付かなかったのだろうかと思惑うものである。あえて恥さらしになるのも承知で書きすすむ。妙な修正は全体を壊す。そういう苦しい体験自身、書く人にとっては結局は財産になりうるのだが、当座はつらい。そういった事情も全体の遅れと無関係ではなかったらうと、これはいいわけだが、

思う。

そんな次第で読者としても、また一つちがった側面からの読み方も可能になるのではなかろうか。

10冊をそろえるにはやや金額がかさむのかもしれないが、臨床家は年齢とともに、同じ事柄についてもまた異なる視点をもつに至るものであるから、このシリーズ本も、もし可能ならばお手元において、時どきひもとくというのかもしれない。編集委員の先生方、執筆の先生方に重ねて御礼申し上げます。

#### ◇書評エッセンス◇

### 初期分裂病

中安信夫・村上靖彦責任編集

この書の編著者である中安の、一連の「初期症状」の存在の発見から臨床単位「初期分裂病」の提唱、そして精神分裂病の病態仮説にいたる今なお続く研究が精神化臨床一般に与える影響は絶大なものがあり、その貢献は高く評価されてよい。(中略)。

第Ⅰ部は著者らの初期分裂病事例102例について発病年齢や初期症状の発現頻度などを検討し、診断、

治療、転帰などをまとめたものである。ここで顕在発症事例の検討がなされ、初期分裂病臨床の大きな課題と位置づけられている顕在発症予防の可能性について論じている。(中略)。

第Ⅱ部は著者らの自験例8例が詳細に綴られ、精神病理学的な考察が加えられている。

症例の細かな精神症状描写により、初期分裂病とはどのようなものかが理解しやすくなっている。この部分は実際の臨床でかなり参考とされてよいが、解説部分はかなり難しい。とくに、顕在発症事例とされる

3例については、この書のメインテーマになっていることから、記述にも力が入っている。(中略)。

第Ⅲ部は、主に編著者である中安と村上の対談である。村上がその豊かな臨床経験から、初期分裂病をめぐって鋭く切り込んでいく質問を投げ、それを中安が緻密な論旨で受けていく様子が実に興味深い。精神分裂病の難しさを再認識するとともに、精神分裂病臨床の豊かさや奥深さを感じさせられ、評者も大いに啓発されたものである。(評者・高柴哲次郎■精神療法31巻4号(2005年)より抜粋)

# 『入門メルツァーの精神分析論考』について

木部 則雄

メルツァーとは「なにもの」なのか？ さっぱり分からない人もいることでしょう。メルツァーは本書のまえがきで「私が誰だか分からない人は、本書を読まないでしょう」と発言し、本書には履歴等も特に記載されていません。しかし、いくらメルツァーがこうした自信に溢れた発言をしても、極東の国まで彼の理論や思想が届いているとは想像しないでしょう。そこで、メルツァーとは「なにもの」であるかということから記述しなければなりません。

メルツァーは1922年に米国で生まれ、児童思春期を中心とした自我心理学の精神分析の訓練を受けた後に、クラインから教育分析を受けるために渡英しました。クラインの死後、タヴィストック・クリ

ニックの児童家族部門の中心となり、クライン派のこどもの精神分析の発展に寄与しました。特に自閉症を始めとする重篤なこどもの精神分析の実践と理論において、右に出るものはいないでしょう。現在タヴィストックの児童思春期の臨床において、メルツァーの理論は中心に位置づけられています。しかし、メルツァーは本書訳出中の2004年8月に逝去してしまいました。

本書はイタリア人の精神分析家シルビア・ファノ・キャッセセ (Silvia Fano Cassese) によって出版されたイタリア語版からの英語版である『INTRODUCTION TO THE WORK OF DONALD MELTZER』の邦訳です。本書は書物というよりはちょっと厚めの小冊子といったほうが適当ですが、このキャッセセの著作は理解の結晶ともいえるべき賜物であり、メルツァーの描いた複雑な心的世界をここまでコンパクトにまとめ上げたものです。

さて、本書の翻訳は私の個人的関心、というよりも必要性に端を発しています。

きべ・のりお=精神医学、精神分析

白百合女子大学発達心理学専攻 教授。著訳書に『現代の精神分析 (共著)』(日本評論社)、ヒンシエルウッド著『クリニカル・クライン (共訳)』(誠信書房) など多数。このほど、S.F. キャッセセ著『入門メルツァーの精神分析論考』を翻訳・刊行。

私は日々の臨床で出会う重篤なこどもたちの診断だけでなく、治療、対応にも苦慮しています。こどもの精神科での診療はマニュアル化され、行動上だけの評価で診断が成され、適応にのみ視点が注がれるのが現在の傾向ですが、発達障害であれ、器質疾患であれ、個々のこころのありさまや悩みに耳を傾けることができないければ、臨床家と称することはできないでしょう。ところが、実際に言葉も儘ならない重篤なこどもたちに対面する時、私たちが彼らのこころを知ることは不可能という絶望感に襲われてしまいます。メルツァーはこうした悩みを持つ私たち臨床家に対して道標を与えてくれるのです。

本書の翻訳は、まだメルツァーが健在であった昨年の春に、私とタヴィストックに留学中の脇谷順子さんとの共同で企画しました。本書の翻訳を企画した時点から、解題はメルツァーがタヴィストックで最も光り輝いていた時代に、メルツァーから直接指導を受けた山上千鶴子先生にお願い致しました。山上先生の解題はまさに「メルツァーとの経験から学ぶ」パート2といった内容であり、痛快の限りです。メルツァーと同じように、頭でっかちな精神分析理論は一蹴され、スノッピな紳士面をした精神分析家は片隅に追いやられ、魂というこころの深遠の淵に触れるには、もっと泥臭く汗をかかなければならないと教えられているように私には感じられました。この解題によって、本書が原著よりもさらに面白い書物になりました。さらに幸いなこと

に、山上先生にはメルツァーの序文、インタビューの章の翻訳も手がけて頂きました。

本書の内容は、メルツァーの論文・著作に従って、章立てが成されています。侵入的投影同一化から閉所までを網羅しています。メルツァーの理論の根幹は、第1章に記載されている「侵入的投影同一化」のアイデアです。肛門期の始まりは、乳幼児に分離不安と新たな同胞への不安を掻き立てます。そして乳幼児は母親との分離を否認するために、母親の身体に肛門から秘密裏に侵入しようとします。その結果が肛門マスターベーションであり、母親の身体の中に侵入するという空想は、自らの身体への侵入となってしまう。母親との非分離感に苛まれている時、空想は本来投影されるべき外的対象ではなく、自らの内的対象に投影同一化されることになります。これによって、自らの中に依存すべき内的対象が確立され、偽りの成熟が達成されます。「侵入的投影同一化」は「地理的混乱」の概念へと発展しました。そして、この「地理的混乱」は『精神分析過程』の中心的概念となりました。

さらに、重要な概念のひとつは水平スプリッティングです。クラインが語る授乳時のスプリッティングとは異なり、母親の身体をよい対象としての上半身、悪い対象としての下半身に二分割した視点は、『美の享受』で上半身の魅惑的な母親という審美的対象の概念へと発展し、妄想分裂ポジションに先行する抑うつポジションという新たなクライン派的心的

発達論が創案されるに至りました。さらに、『閉所』では下半身を直腸区分と生殖器区分に二分し、下半身区分に囚われることのおぞましい閉所の世界の虜になってしまうことを描き出しました。メルツァーの重篤なこどもたちとの臨床の成果は共著『自閉症の探究』として発表されました。その中では、ひとつの対象を認識する際に通常であればそれぞれの感覚が統一されてひとつのイメージができるはずのところを、対象がひとつひとつ

つ感覚に「分解」されるという静なるスプリッティングの概念が創出されました。これが後の倒錯、フェティシズムの概念の基盤となりました。

また、この著作で提案された「こころの次元性」は、臨床的にも有効な概念であり、我が国でも馴染みのあるものになりつつあります。メルツァーの描き出した心的世界、技法の応用は、私たちに大きなインパクトと臨床という大海を航海するコンパスを与えるに違いありません。

◇書評エッセンス◇

こころの再生を求めて

アルヴァレス著 千原雅代・他訳

(前略)。

本書の前半部分は深刻な引きこもりを見せた自閉的なロビーという一人の少年の長期にわたる治療経過を述べながら自らの理論を展開している。この部分は実際の臨床の記載だけに多分に著者の感覚的、比喩的表現が多く、加えて英語的表現が多いためなのか、私はすんなりと読み進められないもどかしさを感じた。しかしながら、その率直な表現ゆえに著者の臨床に対する誠実な態度が読み取

れ、また著者の発想の航跡は理解しやすい。何よりも私を驚かしたのは、著者の細やかな観察と緻密で繊細な解釈であった。また、後半部分ではポスト・クライン学派の理論展開について、最近の乳幼児精神医学や精神分析学のさまざまな論文を引用しながら著者なりの見解、解説を加えているが、ここでも彼女の学派を超えた柔軟な姿勢が見受けられた。治療の実的な注意点についても述べられているが、見逃せないものが多かった。

ご存知のことと思うが、タビストック・クリニックでは児童心理学や児童心理療法の専門家研修の一部

として、ごく一般家庭での「乳児観察」が義務づけられている。(中略)。この研修がいかに意義あるものになっているかについては想像に難くないが、本書でもそこから得られた幾つかの知見が取り上げられている。

本書の特徴は Klein の対象関係論をベースにしているものの、今までの精神分析学において不明確であった「精神病的で同時にまだ子どもでもある患者」についての理論や技法に「発達の思考」を取り入れたことであろう。(後略)。

(評者・川畑友二■児童青年精神医学とその近接領域 44 巻 3 号 (2003 年) より抜粋)

## ●情報板

■書誌 2005. 10～12

### 愛着障害と修復的愛着療法

リヴィー・他 A 5

6720円 ミネルヴァ書房

### 関係性のなかの非行少年

松嶋秀明 A 5 2940

円 新曜社

### 関与と観察 中井久夫 A

5 2730円 みすず書

房

### 心の専門家が会おう法律第

2版 津川律子・他 A

5 2520円 誠信書房

### これからの職場のメンタル

ヘルス 藤井久和 B 6

1890円 創元社

### サイコセラピーの部屋 忠

井俊明 A 5 2625円

ナカニシヤ出版

### 質的研究 step by step 波

平恵美子・他 B 5

2520円 医学書院

### 自閉症児の学ぶ力をひきだ

す 河野俊一・他 B 6

1470円 日本評論社

### 自閉症と小児精神科 タス

ティン 平井正三訳 A

5 3675円 創元社

### 新催眠の誘導技法 ガフ

ナー 門前進訳 A 5

3150円 誠信書房

### 精神障害への解決志向アプ

ローチ ローワン・他

A 5 2730円 金剛出

版

### 精神分析における言葉の

活用 妙木浩之 A 5

3570円 金剛出版

### 聴覚障害者への統合的アプ

ローチ 村瀬嘉代子 A

5 2310円 日本評論

社

### DVD付認知療法・認知行

動療法カウンセリング

伊藤絵美 A 5 12600

円 星和書店

### 発達に遅れのある子の就学

相談 海津敦子 B 6

1470円 日本評論社

### 発達臨床心理学ハンドブッ

ク 大石史博・他 B 6

2730円 ナカニシヤ

出版

### ふりかえったら風1/2

北山修 B 6 1995円

みすず書房

### 慢性うつ病の精神療法 マ

カロウ 古川壽亮訳 B

6 5775円 医学書院

### 遊戯療法 深谷和子 A 5

2310円 金子書房

### ロジャースをめぐる村

山正治 A 5 3780円

金剛出版

†「書誌」に掲載の出版物は、他社の刊行書です。小社では販売しておりません。ご入用の際には、お近くの書店を通じてご注文なさって下さい。

## 学術通信

第26巻第1号

第81号

2005年12月20日発行

初春号

頒価 70円

†読者の皆様へ

本誌の読者登録の際に、ご記入いただいた個人情報、本誌の送付に用いる他、ご注文頂いた小社書籍の配送、お支払い確認等の連絡、当社の新刊案内および関連のブックフェア等の催事のご案内をお送りするために利用し、その目的以外での利用はいたしません。また、ご記入いただいた個人情報について、その情報をご提供いただいたご本人から、開示・訂正・削除・利用停止の依頼をうけた場合は、迅速な処理を心がけ法令に則り速やかな対応をするように致します。

編集人●清水太郎

発行人●村上 学

発行●岩崎学術出版社

〒112-0005

文京区水道1-9-2 I&Iビル2F

TEL: 03 (5805) 6623

FAX: 03 (3816) 5123

振替 00170-4-58495

URL: <http://www.iwasaki-ap.co.jp>

Email: [edit-sct@iwasaki-ap.co.jp](mailto:edit-sct@iwasaki-ap.co.jp)

[bsns-sct@iwasaki-ap.co.jp](mailto:bsns-sct@iwasaki-ap.co.jp)

印刷●ユー・エイド

不許複製